

擬声語擬態語に由来する中国語語彙

坂本一郎

日本語の「ひかり、ひかる」は「ピカッ、ピカピカ、ピカリ」という擬態語によって出来たであろうし、「ころぼ」も「コロコロ」という擬声語に由来するであろう。かかる日本語は相当数あることと思うが、私はかねて中国語にもかような例がかなりあると考えており、その一部は戦前戦中に上海で出版されていた華語月刊に書いたことがあり、又昭和二十三年頃京大で開かれた中国語研究会で「中国語の音義関係」という研究発表をした時もその事に少し触れておいた。

以下の諸語は中国の現代語を専攻する私がかんがえてきたものであつて、日本語の擬声語擬態語から日本人に大体無理なく受入れられそうな語彙を選んだものである。古語文語には中国人が古来擬態語と理解している語彙が極めて多いが、その音が何故に擬態であるか客観的に判断し難いものが多い上に古いことばは私の専門外でもあるのである、それ等語彙はここには挙げないこととする。発音表示はカナの方がわかり易いものはカナで、カナでは不十分なのは新中国の表音方式による。尚ことばの用例には中日大辞典と倉石氏の辞

典を参考にしたものが相当数ある。

ボン、バンの音

「蹦(ボン beng の去声)」ということばがあり辞典には「跳び上る、はねる」と出ている。正しい訳であるが、私が北京で「儼別蹦……お前ボンするな」と言っているのを聞いた時は、子供が室内でボンととび上った時であつた。「蹦ボン」はボンと軽快にとび上る音や語感からできたことばであろう。「魚蹦着」は「魚がピョンピョン跳ねている」である。同音「迸ボン」も「ほとばしる、とびちる、はじける」であるが、「石榴迸開」等はざくろが「ボンと裂け割れる」であつてやはりボンの音感から来ていると思う。

「蹦」に近いことばに「跳」があり「蹦蹦跳跳々々」(とびはねる)ということばもあるが、「跳 tiao」も tiao という母音と力強い有気音の「」から見て擬態的なことばとも考えられるが、これは主観的とのそしりを受けよう。只いづれにせよ力強く又複雑な動作であつて、その点が軽快単純な「ボン」と異なっている。

「細(弼)(ボン beng の陰平)」も右と音が似ているが意味も関連がある。「車胎細了……タイヤがパンクした」、「鼓皮硬細々……太鼓の皮がパンと張っている」、「細児細児地……ピンと張って」。これ等は日本語のパン、ボン、ピンと同様の音感であるが、「細着險……ふくれつつらをする」、「細帯」等の用法も右の意味が拡張使用されたものと考ええる。

「碎(ボン peng 陰平で有気音)」は擬声語で「碎々両声人倒在地下……パンパンと音がして人が地面に倒れた」、「碎的一声門開……パンと門があいた」。かように激しいパン、ボン時にはドカンという音であるから有気音となっているが、「心怦々地跳……胸がドキドキする」の「怦」(同音)や「抨撃……難詰する」、「抨彈……弾劾する」の「抨」(同音)も意義上明らかに関係がある。

「膨(ボン peng)」は「膨脹」の「膨」であるが、「鼓膨々……パンパンにふくれた」(蓬々とも書く)という用法から見ればやはりボンと張りきった状態で擬態擬声に由来することばである。

「棒(パン bang の去声)。「棒」という名詞の外に「硬棒……がんじょうな」、「緊棒々……がっちりひきました」、「硬棒々……ものすごく硬い」、「身子棒……体ががっちりしている」の如く固くがっちりした感じのことばであるが、前記「硬細」が「硬棒」と音も意味も似ていることから見て、やはり擬態的なことばと考える。「棒(ぼう)」ということばも或は「がんじょう」、「がっちり」に關係があろう。以前北京では「棒パン」を動詞にした「棒了パンラ」

ということばは婦人の前では口にせぬがよいと言われていたが、現在では方言の影響か「棒パン」の意義が拡大し「すごい」、「りっぱ」というような意味の形容詞として盛んに用いられている。「写得棒極了……実にりっぱに書いてある」、「他真棒……彼はほんとうにすごい」。

「綁(bang の上声)」。一般に「しげる、逮捕する」等の意味に用いるが、本来は「がっちりグルグルまきにする」ことであって、この点が「細 kun」とちがっている。前記「緊棒々」を「緊細々」とも書くことからわかるように、これも「パン」の「はりきった」、「がんじょう」等の音感に関係があると考えられる。「五花大綁」と言えば「かじがらめにしげる」である。

「邦(bang の陰平)」の仲間、グルーブ、秘密結社等の意味も右「綁」や「棒」に心理的につながっており、又「邦」(同音)の「くに」という意味もこれ等擬態語と無関係ではあるまい。

「板(パン)」これは pao でロで終り音は稍ちがうが、「肩膀兒板了……肩がこった」、「板臉……顔をこわばらせる、仏頂面」、「他太板……彼はゆうづうがきかぬ」、「死板板……考えがコチョコチ」等の用例から見れば「いた」の連想というよりやはり上記一連の音感からできたことばであらう。

「碰(ボン peng の去声)」ぶつつかる、ぶちあてる、出会う等の意味であるが、「碰破了玻璃……つきあたってガラスを割った」、「碰頭……頭がぶつつかる、出会う」という用法から見ると前記

「砰ポン」に関係があろう。この「碰ポン」は麻雀用語として日本でもよく用いられている。

「胖(パン)」 「心広体胖……心が広く体がゆったり」という古い用法では pan と読むし、又「胖」の音符の「半」から見て当然 pan の音であるべきであるのに、「肥えた、太った、デブ」という用法では pang と口腔内の広い ng の音となっている。これも「太った」という意味が本来の音を擬態的な口腔内の広い pang に変えたものと思う。

口の動作

口辺の漢字には擬声や擬態と予想されるものが多いが、擬声以外の用法で日本人にもはつきりそれが擬声擬容に由来すると首肯できるものは数多くはない。

「吐(ト) 上声去声」は「吐く」であるがトの口の形と有気音の「ㄊ」から見て明らかに擬態語であり又擬声語でもある。「吐吐沫……つばを吐く。日本でも子供に「ツーしなさい」という人がある。「嘔吐」の「嘔」も ou で嘔吐時の始めの口腔内の形そのままの擬態語。「唾(tuo……つばき)」もこの関連語である。

「啐(cui)の去声」 元来たんやつばきを強く吐きかける動作であるが、「こっぴどくしかりつける」という意味にもなる。若し南方式に入声で言えば、その口の形と音の速度がその動作そのままである。北京では去声であるが、北京の去声は稍江南の入声に似た調

擬声語擬態語に由来する中国語語彙(坂本)

子である。「啐人……人につばをはきかける」。cuí のもこの動作にふさわしい有気音である。尚このことばは「チェッ」と軽蔑する擬声語にもなる。「啐! 這個老梆子! ……チェッ! このおいばれめ!」。

「吹(chui)」 笛等を吹く動作とこの音から見て擬態音と思う。ch も有気音である。日本語「ふく」の「ふ」も擬声語であろう。中国語の「吹」も日本同様「ホラを吹く」等の用法がある。「吹」がつく「吹嘘チュイシュイ……吹聴する」の「嘘(xu シュイ)」も息をはく擬声擬態語で、あえぐ様子は「喘嘘々」という。

「哈(hā)」「哈哈笑(hā hā xiào)」のハは音も動作も中国音の ha そのままである。又眼鏡に息をハッッと吹きかけるのを「哈眼鏡」、寒い時手に息をふきかけるのも「哈手」という。

「嘻(xī)」「この音は古音を保存する南方では「ヒ」に近い。「ヒヒヒ」と笑う音と口の形で「笑嘻嘻……ニコニコ」「嘻笑……クスクス笑う」と辞典にあるが、要するに「ヒ」や「ヘ」という口の形で笑うことである。「嘻々哈哈……へへへハハハと笑う」。これから見ると「喜」や「禧」も元来は擬声擬態語であることがわかる。

pu' pai' pen

「噗(pu)」「これは「噗的一声把灯吹滅了……プッとランプを吹きつけた」の如く本来はプーという音であるが、「小猫噗地跳上床来……小猫がパッとベッドにとび上った」の如く「パッ」という

迅速な動作をも示す、これは「撲」の音が元来入声であることにも関係があろう。これにより「猫撲耗子……猫が鼠にとびかかる」の「撲(pu)」も擬態語に由来することがわかる。「撲他去」は「彼におどりかかる」。尚「撲」は「撲騰ドスン」、「撲通ポトン」等の擬声語にも用いられている。

「拍(pa)」拍的一声拍桌子……パタンとテーブルをたたくの如く擬声語で「拍噍……パチャ」、「拍嗒……バタッ」のように用いられるが、これにより

「拍(pai)」もこの擬声によりできたことばと思う。「拍」は平たい物でたたく動作であるだけにこの pa とか pai という音がふさわしい。又「拍」と「拍」は南方では同音のところが多い。右の「拍噍」も「拍噍」と書くこともある。

「噴(pen)」噴飯……ご飯をプーッとふき出す、「噴布……きりふきする」、「噴々香……ブンブンよい香りがする」の如く擬態的なことばである。

これ等に共通の p の音は閉じた両唇をつき破って出す有気音であるため、そういう感じの動詞には p を語頭にもつものが多い。

例、砲 pao、破 po、屁 pi、剖 pou、霹 pi、劈 pi、咆 pao、
砲 pao、泡 pao

太鼓の音等

「噹(tang)」噹的一拳打在桌子上……どんどんどぶで卓をたた

く。

「鏗(tang)」太鼓鐘銅鑼等の音。

「鞆(tang)」太鼓の音。

これらは皆大きい音で古音の残る江南では「ドン」とか「ダン」という濁音で日本人の音感同様である。この大きい感じは

「堂(tang)……大広間」とか「堂堂……堂々たる」とは無関係ではあるまい。というのは太鼓の音には軽快な「鏗(teng-ton)」という擬声語もあるが、「鏗々地」と言えば老年だが元気ではりきっているという副詞になるので「ドンドン」という太い音は「堂々たる」感じに用いられる可能性があるわけである。

拭く塗る等

「刷(shua)」小雨刷々地下……小雨がサーッとふる、「刷地一下跑了……サーッと逃げた」、「サーッ」という音感のことばで本来入声である。

「刷(shua)」ブラシやタワシを用いる動作であるが、右「刷」により「サッサッ」という音によりできた動詞と思う。動作の目的を問わず動作の形式に重点を置くという中国語動詞の特性によって「刷」はブラシでこすり落とすのも塗るのも共に「刷」という。「刷子……ブラシ」という名詞にもなっている。

「擦(ca-tua)」南方では「ツァ」の入声で音も意味も「刷」に似ているが、ブラシ以外布等でふいたり塗ったりするのに主とし

て用いる。「擦布……ぞうきん」、「擦子……ふき物」。

「刮 (gua コフ)」「刮打桌子……テーブルを打ちたく」のように音に關係のあることばで「刮掉……こそぎ落とす」、「刮垢……あかをかき落とす」の如く「ゴシゴシ」こするのに用いるか又は「刮臉……顔をそる」のように鋭いものでそる意味になる。shua や ca とちがって gua (元は入声) には固さがあるので、用法のちがいができたものであろう。「刮」は用法が更に拡大し「刮地皮」と言えば強引にその土地の人民を搾取するという意味になる。

「抹 (mo)」「これも「けす」とか「塗る」ことであるが、mo の日音が示すように「サッサッ」、「ツァツァッ」とか「ゴシゴシ」ではなく軟かみのある動作である。「抹胡子……ひげをなでる」、「抹黄油……バターを塗る」、「抹眼泪……をこする」。

な き 声

娃娃 (wa (陽平) wa……赤ん坊)。「孩子哇哇叫……子供がワーワー泣く」の「哇々 wa wa」からできたことばにちがいない。
老鴉 (lao gua……からす)。からすは「咕々 (gua gua) 地叫……カーカーとなく」ので擬人化して「老鴉」というわけである。からすは「鴉 (ya)」とも言うが、この「鴉」の音符「牙」は江南では nga であるからこれもその鳴き声によって古代にできたことばであろう。

猫 (mao) のなき声は中国語では mi wu か miao であるが、「猫」

擬声語擬態語に由来する中国語語彙 (坂本)

の字の音符「苗」は音 miao であって、これもなき声に由来するわけである。鹿児島県の一方言で猫のことを「マオー」というのであろうが、これも多分なき声が訛って「マオー」となったのであろう。

蚊 (wen) 蚊のなくのは「嗡嗡 weng weng」と言ふ wen に近いが、江南には Veng という音もあり、元は「ブンブン」という音によって名づけられたものであろう。「蚊子一か」。

クルクル、コロコロ等

「咕嚕」又は「骨碌」(音クルル)。「咕嚕咕嚕地滾……コロコロころぶ」、「咕嚕咕嚕転……クルクルまわる」、「咕嚕咕嚕的雷声ゴロゴロという雷の音」、「水焼得咕嚕咕嚕地響……湯がたぎってグラグラ音がする」の如く擬声語であるが、動詞にもなり「咕嚕出去」は「ころんで出て行く」、「把球く過去」は「ボールをころがして行く」、「一骨碌起来了」は「クルッと起き上った」である。このクルルは名詞「軋轉クルル」ともなり、車輪、滑車、ロクロを意味する。日本語「コロ」は中国からの伝来語が日本の「コロコロ」からできたことばかのいづれかであろう。日本語の「ころぶ」は「コロコロ」から、「くるま」は「クルクル」に關係があるであろう。

「滾 (gun ころぶ)」。ころぶという動詞は「咕嚕」でよいが、普通は「滾クイン」と言い前記「咕嚕出去」は一般に「滾出去」と言い、「ころんで出て行く」意味から転じて「出てうせる」とい

う軽蔑のことによく用いられる。かように意味は「滾」と「咕嚕」共に同様であって相違点は「ロ」と「ロ」のちがいだけである。ところが「一」と「ロ」は相通じ易い音で中国では「一」と「ロ」との区別のない地方もあり、北京でさえ「脊梁」を *ji liang* を *ji niang* と訛り、「日本の」敦賀も「ツノガ」の訛りと言われている。かく考えると「滾」は「咕嚕」に由来することがわかる。「滾」は「ころぶ」意味以外に「滾開の水……グラグラわいた湯」、「滾熱……とてもあつい」、「滾子……ローラー」とか水やほこりが「滾々」というように用法が多いが、共に上述の擬声擬態に関係があるわけである。

「轆轤(ルルー)」「ゴロゴロ」という車の音であるが、「轆轤(ルルー)」「と書けば「ろくろ」である。これも「クール」の同類であることがわかる。

「輪(lun)」「これは「輪、まわる、まわす」であるが、「クール」と「gun」の関係と同じく右「ルルー」と「lun」との関係が想像される。「車輪」という中国語は俗に「車轆轤」とも言い、*lun* はクールとも密接な関係があるのである。

「掄(lun ぶりまわす)、これも「輪」の「まわす」という動作の中で手に関するものに手辺をつけたまでである。「掄刀……刀をぶりまわす」。

「咕啾(gu du……(グググツ、グラグラ)」「水咕啾開了……お湯がグラグラとわいた」、転じて「グググツグラグラ煮る」とい

う動詞にもなる。「把白菜再咕啾……白菜をさらにグググツ煮る」。尚この「咕啾」という音は中国語の「ロ」音の性格から口をとがらせて発音する。それで次のような擬態動詞にもなる。「他气得把嘴咕啾起来……彼は怒って口をとがらせた」。

liu 音

出溜(chu liu すべる、ツルツとすべる。)

「從坡兒上出溜下来……坂からツルツとすべりおりる」、「在冰上打出溜……氷の上をすべる」、「……了了一個跟頭……ツルツとすべってころんだ」、「ツルツ」という擬態語が動詞になったものであるが、意義が拡大して「那個人……了」は「奴はぐれた」という意味になる。然し以前北京では日本語の「あいつすべった」と同様「不合格」という意味にもなったように記憶する。「光………ツルツル光る」、「光巴………ツルツとなめらか」、これは「光巴吃流」とも言うが、「吃流」の音も「出溜」に近い。

溜(liu)「すべる」という意味以外多くの用法があるが、「光溜……なにもなくすべっこい」、「光溜溜……スベスベテカテカ」、「滑溜溜……ツルツルした」、「溜氷……スケート」等の用例でわかるように「出溜」という擬態語に大いに関係がある。元々一音やラ行音は「ナメラカ、スベル、マルイ、ナガレル」等の感じを示す傾向があり、日本語ではラ行音は本来語頭にはないと言われるが、ツルツル、ズルズル、スルスル、ズルイ、ヌルヌル、コロコロ、

クルクル、グルグル、トロツとの如く右の感じが二字目のラ行音で表わされている。中国語一音の中ではㄣにこの感じが強く「すべる」以外に色々な用法があるが大抵右の感じに関係がある。「他溜了……彼はスルツとぬけ出した」、「溜進來……スルツとのびこむ」、「説溜了嘴……口をスベラせた」。「溜肩膀などで肩、ズルい態度」、「溜奸溜滑……ズルい」。

「溜食……食物の消化のため食後散歩する」、これもㄣ音のナメラカな感じから来たことばと思う。一部日本人によく知られている「溜達々々……散歩する」は「溜一溜」とも言い、やはり散歩して全身をほぐしなめらかにする意味であり、馬を運動させることも「溜(溜)馬」という。

「溜ㄣ 饅頭」は辞書には「マントウを蒸しなおす」とあるが、これも固くなったのをやわらかにナメラカな感じにするので「ㄣ」というのであろう。料理法の一つである「溜魚片」等の「溜(溜)」も肉や魚を片栗粉等を入れて煮る所謂あんかけ料理で、トロツとした汁がかかっているのでㄣとなったものと思う。

「溜」のㄣや「石榴」のㄣ、さらに「瑠璃」のㄣもツルツルしてナメラカなマルミに関係があると思われる、又「流ㄣ」も多分関連があろう。「滑溜溜」や「出溜」も時に「滑流流」、「吃流」と書かれることがある。

最後に「柳(Liu)」も同様であらう。従って「柳腰 Liu yao」と聞いた時、中国人は柳の木を連想しなくてもなめらかな曲線を

想像するのではあるまいか。

niu 等の音

「扭(niu 上声)」「niu」と「ni」の音感が似ているが異なる点もあり、その意味も同様に似た点と異なる点がある。「扭腰」と言えば「腰をヒネル、腰をクネらせる」。「快点走吧、別扭了」は「はやく歩け、クニャクニャしないで」であって、かかる動作には日本も「ヒネル、クネらせる、クニャクニャ」というように「ネル」や「ニヤ」等の音も用いられている。「扭々扭々 niu niu nie」は体を左右にふってシャナリシャナリ歩くさまやモジモジするさまであるが、日本語の「クネクネ」とか「ニヨロニヨロ」、「ニルニル」等とどこか共通点がある。「モジモジする」は「扭昵(niu)」とか「扭々昵々」とも言うが、この「捏」や「昵」もその音感から用いられたものと思う。

「扭」には「ひネル」「ネじる」意味があるが、「捏」にも「ひネル」意味があり又「捻(nian 上声)」の「ひネル」も音が似ている。「捏」は「コネル、コネて作る」という意味もあり「捏造」という熟語もあるが、「捏 nie」も日本語コネル、ネルと同様その音感から発生したことばであらう。日本語の「ネ」は「ネチャネチャ」、「ネバイ」、「ネットリ」等「ネル」に関係のある意味によく用いられているが、中国の「粘 nian(陽平)」は「ネバイ」であり「膩 ni」にも「ネバリつく、くっつく、しつこい」

という意味がある。「擽 コウ」の「ネジル、ヒネクレ」という意味もこの一連の音に関係があろう。俗語で女の子を「妞 コ 兒」というのも以上の女性的な感じに由来するものと考ええる。

(以上)